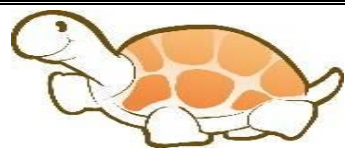


のこのこたより



令和 7年11月 第127号

社会福祉法人 晃宝会
特別養護老人ホームあじさい園 宝

住所:奈良市南村塚町99番1

電話:0742-24-0878

fax:0742-23-0373

「あきらめない心」

2ヶ月後に成人式を控えたごくごく普通のお嬢さん、伊藤眞波さん。ICUのベッドで気がつくくと右腕はこなごな。歯もなく傷だらけの顔は薬の副作用でパンパンに腫れ、痛くて眠れない毎日。この現実から逃げ出したくてベッドであれば「お母さん、助けて」と叫び続けた。こなごなにくだけた腕は感染し、いよいよ別れを告げるしか道はなく、力をふりしほり自分の口でやっと言えた。

「先生、私の右腕を切ってください」
交通事故の1分前に戻りたい・・・。

当時、看護学校の2年生、学校を辞めてこれから一生実家で親と一緒に暮らせばいいと父母は言った。しばらくして学校の先生に「あなたはもうしたいですか。」と聞かれ、「もう逃げたくない、私は看護師になりたいです。」と答えた。先生は「それであれば看護師専用の義手を準備してください」と言われ、学校を続けられるよう国に働きかけ全力でサポートしてくれて、前例のない片腕の看護師となった。

しかし思うように生きられず、その時上司からかけられた言葉は「被害者ヅラしない、助けて欲しいと言え、できないことはできないと言え」だった。何かにぶつかっても、自分で起き上がれる強い人間になりたいと決意し、水泳を始め、北京とロンドンオリンピックの競泳日本代表となった。

2015年結婚、3人のお子様に恵まれた。しかし、重さ3kg以上の片腕がないとまっすぐ歩けない、首の座っていない赤ちゃんを抱っこできない、オムツが変えられない、お乳を飲ませることができない、お料理ができない、出かけられない・・・、しかし、少しずつ少しずつ足を使ったり、口を使ったり、工夫をしながらできるようになった。

静岡市で育った伊藤さんだが、関西の病院で働くことができて、笑顔になれたと感謝して、関西のこの町で家族と一緒に一生懸命生きていくことにした。優しいご主人と3人の娘様と幸せな暮らしをされている。

さらに、それだけではありません。伊藤さんはヴァイオリニストです。ヴァイオリニスト専用の世界にひとつの義手をつけて、肩甲骨の動きで弓をあやつり、見事に3曲披露された。

幸せになりたいから、家族の喜ぶ顔が見たいから、一心不乱に伊藤さんの日常生活はつづきます。

恒楽坊あすかこども園の園児さん達が来園してください、体操や元気な歌声を披露してくれました。手あそびでは、「しあわせなら手をたたこう」「頭肩ひざぽん」やじゃんけん遊び等に参加され、楽しい時間を過ごされました。



ご利用者様方は、本末先生の健康体操で手、指、足や首を動かし、「ハビ」を頑張ってくださいました。



いつもご協力、ご支援ありがとうございます。事前予約での面会を行っています。面会にお越しいただきありがとうございます。



敬老の日のお祝いのお品として湯あがいたオルのプレゼントがありました。代表のご利用者様に受け取っていただきました。



あじさいサロン開催！地域の皆様と手話やリズム体操、先生方の三味線や太鼓の音色に合わせて懐かしい歌の数々を熱唱されました。



11月の行事予定

7日:ハーモニカコンサート 14:00

10日:あじさいサロン 14:00

10日:お寿司のオーダーバイキング

昼食

21日:誕生日会

15:00

森田記念財団後援の訪問レクリエーションとして、大阪大学奇術研究会の皆様がお越しくださいました。



ご利用者様、ご家族様にも参加いただくコーナーがあったり、会場は、拍手喝采、とても楽しい時間を過ごすことができました。ありがとうございました。



第102回 歯みがきの歴史

口の中にも職人技 江戸庶民は「歯抜き師」「入れ歯師」が頼り

西洋医学が入った来たが歯科医学は昔のまま江戸時代、漢方中心だった日本の医学に変化が現れます。幕府は鎖国政策をとっていましたが、外国文化の吸収が断絶することはありませんでした。そして、蘭学が盛んになっていきます。その中心は、解剖学や外科学をはじめとする西洋医学。杉田玄白たちによって「解体新書」が翻訳刊行されたのは1774（安永3）年のことでした。けれど、歯科医学には、あまり進歩がありません。「医心房」を書いた丹波康頼を祖とする「口中科」は一子相伝にとどまり、将軍家や朝廷の外に広まることはありませんでした。抜歯や痛み止めなどは、口中医、歯薬医、牙医とよばれる歯医者たちが行っていました。むし歯の処置がどのように行われたかは、わかっていません。



松井源水の曲独楽の図。

『近世職人絵尽』狩野晏川／模写（原本は鋤形薫斎・画）／江戸東京博物館所蔵／Image:東京都歴史文化財団イメージアーカイブ

気合いで歯抜き、入れ歯は匠の技で

江戸庶民が頼ったのは、歯抜き師や入れ歯師でした。「痛いことは一瞬で終わりにしてほしい！」こんな風に願うのは、今も昔も変わりません。だから、評判を呼んだ歯抜き師といえば、居合いの達人たちでした。大阪の松井源左衛門や江戸の長井兵助は、巧みな口上で人を集めて、居合い芸を見せていました。そして、指で歯を押さえて、気合いを込めて、一瞬にして歯を抜いたといえます。浅草寺界隈で、独楽（こま）回しの曲芸を見せていた松井源水も、歯薬と歯みがき粉を売り、歯抜きを行っていたようです。そして源水の名は代々、引き継がれていきました。入れ歯は、もともととは、仏像をつくる仏師が片手間に行っていました。江戸時代には、入れ歯師という専門の職業になりました。もちろん、あごの寸法を測って、ひとりひとりに合わせてつくるオーダーメイドです。材料は木。なかでもツゲの木が好まれました。ところで、庶民の頼りは、ほかにもありました。それは、神様。「歯神」が祀られていたり、歯痛治療の願いをかなえてくれる神社やお寺、お地蔵さんなどが、全国各地にありました。今も、歯痛祈願に人が訪れるところが残っています。東京都文京区の白山神社のように、歯フラシ供養が行われ続けているところもあります。

